

語り継ぐ平和への思い

早乙女勝元さんの講演

今日は「こまえ平和フェスタ2009」に参加できて名誉であり嬉しく思います。

今回、このフェスタのテーマは「戦争を忘れず語り継ごう」ということで、そのテーマに即してお話していきますが、時間も限られているので大まかなレジュメみたいなものを用意しました。



語り継ぐ平和への思い、ということで三つのポイントからお話します。

1. 過去から学ぶ 強調したいことは、「何のために必要なのか」ということ
2. 東京大空襲と8・15（8月15日） 私自身の原点と平和の実感
3. そして今日から明日へ
 - 1) もしも憲法9条がなくなったら
 - 2) 過去からの声 未来への声

もう8月に入りましたので8・15が接近してまいります。1年前のその日、私はたまたま家の近くの喫茶店で人を待っていました。そしたらどこかのテレビ局で渋谷か原宿でしょうか、たくさんの若者が行き交う場所でアナウンサーが特に若い女性達にマイクを向けていて、「今日は何の日ですか」と聞いていました。8・15ですよ、皆さん！そして、どう答えるかな～と思って見てましたが、私が見ている間中、答えは一つ、「お盆です」でした。確かにお盆です。ただ、「敗戦記念日」とか「終戦記念日」とかの答えが咄嗟に出てくる若者がそんなに減ってしまったのでしょうか？ それはいいことなののでしょうか、それともそうではないのでしょうか？

関連して、ある学生達による手作りの集会に招かれたとき、司会者が私を「早乙女さんは東京大震災に見舞われ…」と紹介しました。東京大空襲と関東大震災と区別がつかない。人災と天災の区別がつかないんですね。日本の現代史のトップに大事な祖父母の頃のことをすっぱり抜け落ちているのではないのでしょうか。それでも中学・高校を出て大学生になれるのですから、ちょっと当惑すべき事態かと思います。

もう戦争が終わって今年で64年です。純粋に戦後生まれの方がこの国の人口の75%になった。終戦時、3歳以下の子供を合算すると8割を超えつつある。戦争はもうこりごりだ、と思う人は私も含めて高齢になり、残り時間が少なくなってきました。戦争を知らない世代の代表といえば学生達ですが、私がいくら熱っぽく東京大空襲の惨禍につ

いて語りましてもなかなかピンときません。実感を伴いません。無理もない話で、まるで空気みたいに感じられてしまう。空気があるうちは有難いと思う方はほとんどいない。空気がタツプリあるうちに生まれて、ここまで育ってきたのだから実感を伴わないというのは無理もないと思いますが、空気がなくなってからでは後の祭り、まな板に載せられた魚のように、ジタバタしても間に合いませんよ、ということです。ならば、戦争体験があろうと無かろうと今を生きる私たちにとって共通して大事なことは何か、それは空気の様子によく目を配って生きるということです。

つまり、今の日本並びに世界はどんな状態にあるのか、どういう風に動いて行こうとしているのか、常に社会人としての社会的感覚を磨いて、これは違う、これはおかしいと思ったときは、直ちに主体的なそれぞれの意見の表明が今ほど大事な時はないように思われます。

私どもは過去の60数年前に起きた戦争の惨禍を特に社会的弱者である子供や女性達にとってどうであったのか、ということ学ぶ、知る、ということは単に歴史をあとずさりする行為ではありません。そうではなく、今生きているこの現在がどういう社会なのか正しく認識するためだと思う。なぜなら、過去は現在と繋がっているからです。決して過去と分断されて今があるわけではありません。そしてその現在はまた未来へと繋がっているのです。その未来を人間らしく平和のうちに生きたいからこそ、過去の戦争の惨禍を社会的弱者の立場から知る、学ぶことがこれからの平和の力とどこかで結び合うに違いないと思います。戦争を防ぐと一言で言うでしょう。でも防ぐからには戦争とはどういうものだったのか、民衆にとってどうだったのか、その事実をきちんと踏まえることが大事ではないのでしょうか。

もうちょっとわかりやすい例で言うなら、例えば自動車にはバックミラーがついていますが、ドライバーは後ろをちらちら見ながら安全を確認しつつ好ましい方向に進むためにアクセルを踏むのですよね。

そのミラーが別な光景にすり替えられていた場合の前途は、極めて危険なのです。

今、そういう時代になりました。黒を白と言いくるめる論法がこのところ急に声高になっています。狛江の駅降りると構内に本屋さんがありますね。ちょっと時間があつたので覗いたところ、黒を白と言いくるめる本がもうどっさりありますよ。私の本なんか、まったく見当たりません。それが今日の現実ではないでしょうか。

1番目「過去から学ぶ」を私はそんな風に考えています。この主題の最後を締めくくするのに相応しい言葉があります。アメリカの哲学者でサンタヤナという人がいて、「過去の教訓を学ばぬものは再び同じ過ちを繰り返す」と言っているのに注目しましょう。

2番目の主題（東京大空襲）へ移りますが、歴史をタイムスリップして65年前に戻ります。終戦の1年前、すなわち昭和19年、1944年ですね。この年はそれまでの戦争とは質的に大きな違いがあり、11月末から日本の国土が戦場化しています。それまでの戦場は海の彼方にありました。そこがドイツと大きく違う点で、ドイツはヨーロッパの中心部にあり、国境に接している国は7つか8つありますから、ドイツに火の手が上がれば、ヨーロッパ中すぐに戦火にまみれてしまう。でも日本はそうではなく、周りが全部海です。その海を越えて、どこか敵の軍隊が国土に攻めてきて戦争が始まった

のでしょうか。このところは以外に単純だけどとても大事な点です。なぜなら日本の過去の戦争は侵略ではなく自衛のためだったという論法が今非常に強くなっているからです。本当にそうでしょうか？海を越えて出掛けて行ったのは日本軍なんですよ?!これを外征と言います。こちらの日本軍が海外のアジア諸国や太平洋の島々へと「自衛のため」と言って、外征したのです。これが自衛のための戦争であるはずがない。侵略とか植民地支配とか言ったら国民の支持を得られません。それを権力はよくわかっていたから、うまいこと言って国民を幻惑させた。当時でいうと、「東洋平和のため」とか「大東亜共栄圏開放のため」と正当化しました。その軍国主義教育は徹底したものでした。

私たちはそういうものかと信じている内に戦場が国土へ移ってきたのです。

アメリカが日本向けに開発した B29 爆撃機が登場します。2300 km も離れたグアムやサイパン、テニアンなどに基地を作ってそこから飛んできた。もちろん日本軍もいたのですが、みんな壊滅して巨大な滑走路が出来、東京を中心にやがて日本中を爆撃するようになる。こうして不気味なサイレンの鳴りやまぬ日々となったのです。

当時私は墨田区寺島町に住んでおり、12歳で国民学校の高等科1年、つまり中1です。でも、もう学校は行っておらず、早生まれなので学童疎開も免れ、代わりに学徒勤労員で軍事工場にかり出されました。隅田川沿岸の大鉄工所で昭和19年の9月1日から始まりました。学校へ行くと先生が待ち構えていて、「喜べ！お前たちもお国のために尽くせるようになった」と言って、手ぬぐい（鉢巻）を支給、ではなく買わされました。（“神風”と日の丸が描かれたその手ぬぐいを見せながら）私はそういうことにとってもこだわりがありますが値段は覚えてません。これを額に着けながら先生は続けます。「日本は神の国。そして神の子孫である現人神、つまり天皇が始めた戦争だから、これは聖戦で、誠の戦いなのだ。それに刃向かう米・英諸国は鬼畜で鬼や獣だから彼等の連合艦隊が接近して来ても天が味方してくれる。決して負けるはずがない。必ず神の風が吹くから、お前たちも一日も早く神風に！」と。最初、神風が吹くのを待っていればいいのかな、と思いましたが、それは要するに特攻隊になれ、ということでした。当時14歳から少年航空兵や少年戦車兵になれました。男の子の進路はそれしかなかった。女の子でも勇ましい子は日赤を通じて従軍看護婦を目指したりする時代でした。そのうち鉄工所で働いている暇もゆとりも無くなりました。

年が明けて昭和20年（1945年）1月1日の元旦からB29は、東京に恐ろしいお年玉を落としていった。爆弾や焼夷弾のお年玉です。連日連夜、防空壕でじっとうずくまっているか、焼夷弾の降る中を逃げて歩くのか…そんなことが日課になっているうちに、これは危ないな〜と恐れていましたが、やがて3月10日の大空襲になるのです。

B29の東京への空襲は100回以上に及び、大規模爆撃を3回受けた。その1回目が東京大空襲の3月10日です。2回目が4月12～13日に東京の西部方面、3回目が5月24～25日で焼け残りの東京全体です。しかし、人的被害が空前の規模に達したのが1回目の東京下町大空襲です。

3月10日の東京大空襲にはそれまでにない特徴がいくつかあります。その一つは真夜中だったこと。これで高射砲を無力にした。その二は300機もの大編隊。三つ目、超低空2000メートルでの有視界無差別爆撃でした。そしてもう一つは圧倒的な焼夷

弾攻撃です。目標は東京下町の隅田川を中心に、木造家屋がひしめく超人口密集地帯である下町地域でした。爆撃は3月10日の午前0時8分から始まり約2時間という短い時間ですが、東京の歴史と運命を一変させてしまいました。

被害状況は甚大で家を焼け出された罹災者が101万人。傷ついた人のデータは無数にあってどれが本当か分からないくらいで、私も目をやられた一人なので軽症に入っているのですが、尊い命を犠牲にした東京都民、下町庶民。その多くは留守家族で、男はみな戦場に送り出されているから、子供と女性とお年寄りのいわゆる社会的弱者に集中しました。警視庁の発表では、死者の頭蓋骨だけの数88,793。凄い数ですが、未確認を含めると推定10万人の命が一夜にして奪われてしまった。こんなに短時間でこれほど多くの人々が亡くなった空爆は前例がなく、空前の大量殺戮と言えます。それまでにない未曾有の人的被害でした。そのあとは8月6日、9日の原爆投下、そしてそれ以前の沖縄南部での戦いがありましたが、大量無差別殺戮の一回目は東京でした。

3月10日の朝が来ると、大勢の人達がこの焼野原に動員されてきました。先ずは軍隊であり警防団であり、あるいは学生や刑務所の囚人部隊まで…死体処理班です。B29が火葬場だけ焼かずに残してなんかくれませんかから、10万体の処理は並みのことではありません。都内の130箇所からの公園や墓地、神社の境内などに深い穴を掘って立体的に埋めました。

死体処理に従事した一人の若者の記録があります。題名は「美しい顔」。1970年7月25日付けの朝日新聞に掲載された一部をご紹介します。

「その遺体は地面に顔をつけてうずくまっていた。着衣から女性と見分けられたが、なぜこうした形で死んだのか？ その人は赤ちゃんを抱えていた。さらにその下には大きな穴が掘られていた。母と思われる人の10本の指には血と泥がこびり付き爪は一つもなかった。どこから来て、もはやと覚悟して、指で硬い地面を掘り赤ちゃんを入れ、その上に覆いかぶさって火を防ぎ、わが子の命を守ろうとしたのであろう。赤ちゃんの着物は少しも焼けていなかった。小さな可愛い両手が母の乳房の一つを掴んでいた。だが、煙のためかその赤ちゃんも既に息をしていなかった」。彼はこの母親を憐れんで、焼け跡から出ている水を手ぬぐいに浸して来て、その顔と指先を拭いてあげたそうです。

「煙に巻かれながらも苦痛の表情は見られなかった。これは一体なぜだろう？ 美しい顔であった。人間の愛を表現する顔であった。誰かが言った。『花があつたらな〜』。あたりは遙かかなたまで焼野原が続いていた。私たちは数え19歳の学徒兵であった。」とのことです。

今から64年前、3月10日の朝早く、何処の誰か分かりません。若い母親が乳飲み子を抱いて、逃げて逃げて逃げ回って、これがこの世の見納めというところまで追い詰められてしまった。でも、この子の命だけは何としてでも、という母の愛に圧倒される記録ですね。こういう記録をどんどん教科書に載せるべきで、そうすれば人の痛みが分かって人間的な想像力が働くじゃないですか。そして戦争がこうした無関係の女性や赤ちゃんにどれだけ深刻な被害を与えるかということもわかりますよね。命と平和の尊さも！と望みたいところですが、むしろそういう事実を隠蔽していこうとする状況に至っています。大変残念なことと言わねばなりません。

この大空襲の惨禍を公的資料はどう伝えたのか？ ラジオでは「大本営発表」という

形で告げられますが新聞にも載っています。この時の様子を報じた公的資料（大本営発表）で、私がどうしても容認できない一行があります。それは、「都内各所に火災を生じたるも、宮内省主馬寮は2時35分、その他は8時頃までに鎮火せり」というものだった。主馬寮とは天皇の乗る馬小屋です。それをいち早く消し止めたわけですが、100万人を越える罹災者と亡くなった10万人からの東京都民の命は「その他」の3文字でしかなく、憲法9条が無かったこの頃、人命はこんなにも軽かったということを私は訴えなくてはなりません。

東京を焼野原にしたB29はその後、機首を西に向け、横浜、名古屋、大阪、神戸の大都市への空爆は5月末までに終わり、6月からは中小地方都市への爆撃に変わりました。そして、沖縄の地上戦で南部戦線の悲劇があり、暑い8月になると6日に広島、9日に長崎が、人類初の核兵器の惨禍に見舞われ、日本中の諸都市が瓦礫だらけとなって戦争は終わりました。8月15日の正午です。ここまで、日本人は310万人の尊い命の犠牲を出したことは知れ渡っています。軍人、軍属、民間人を含めた公式発表ですが、民間人の数が少な過ぎるようです。では、日本がアジアで奪った命はどのくらいか？よくは分かっておりませんが、推定2,000万人は周知の数字です。

国の内外での戦争の惨禍と反省と犠牲の上によりやく平和が蘇りました。ですが、8月15日の終戦以降、私は平和が来たという実感は無かったのです。この先どうなるかわかりませんし、平和ということがどういうものか知らなかったし、私が生まれる1年前から日中戦争、つまり満州事変が始まっていて、そこから足掛け15年あるから「15年戦争」と言われるわけです。

その私が、「これが平和か！」と思ったことが二つあります。一つは、灯火管制解除で堂々と夜に灯りをつけてよい。裸電球の下で家族の顔を見渡した時に、「平和って明るいんだ。眩しいんだ。」腹はペコペコでも今夜から防空壕に入る心配なしにぐっすり寝て朝を迎えられる。嬉しかったですね。手足の関節がバラバラになってしまうと思うほどの感動でした。生きている間にそういう日が来ることを先生は教えてくれなかったし、多分、一億玉砕だろうと言っていたので、こんな日のことは考えてもいなかった。

平和の実感その二、実感というよりは確認ですが、翌年の11月3日、新憲法公布です。私はまだ14～15歳で憲法の条文に関心を持つほどの年頃ではなく、しかも学生ではなかった。敗戦の翌年から下町の工場で少年工となって大学はおろか高校も出られずじまいでした。自分が哀れで仕方なかったが、大正12年生まれの教師をしていた兄から教えられた。その兄が言うには、憲法9条に大事なことが二つ書いてある。まず一つは「絶対に戦争はしない」。そしてその上に「永久に」という文字がある。「永久」という言葉はこの憲法の中には2箇所しか出てこないのですが、もう一つがどこかは今日の宿題です。大切なことの二は9条の2項で、「そのためにありとあらゆる軍備を持たない。国の交戦権は認めない」とした。だから世界のどこかで戦争が起きても日本は手出しをしないし、できない」。紛争が起きたらどうするのかと兄に尋ねたら、「外交だ、言葉。或いは人間同士の信頼や相互理解だよ。これからは平和を先導的に訴えられる国になったんだ。お互いに命拾いして良かったな」。と答えてくれた。私も10万人が死んだ炎の夜をやっと生き延びた一人でしたから、どうして戦争が起きたのか、なぜ大人

たちはあの戦争を止められなかったのか？という疑問や関心を強く持ち、働きながら独学で学びました。

その後、なぜこの戦争を防げなかったのかに疑問を持ち、兄から譲り受けた岩波新書が無我夢中で濫読した。難しい本ばかりでしたが分かるところもあると感動に繋がりがやめられなくなったのです。まさか、その後岩波書店の著者になるとは思っていませんでした。感想帳と日記の2冊のノートをいつも持っていて、昭和21年から付け始めた感想帳にこう記してあります。「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」。宮沢賢治の言葉ですね。それと憲法9条2項、それが私の原点でそこから歩き始めたけれども、2年あるいは3年もしない内に、これはちょっと変じやないの？と思う機会に遭遇しました。

昭和24年（1949年）から25年にかけて日本は逆行コースで、ハンドルを右へ右へと切って行きます。そのきっかけは1950年に朝鮮戦争が勃発。当時、日本は連合国軍の占領下にありましたが、連合国軍と言っても実態はアメリカ軍で司令官はマッカーサー元帥でした。その彼が、戦争が始まるや否や日本政府に向けて7万5千人からなる警察予備隊を作れとの指令を出したのです。隊員は米軍から贈与されたカービン銃を持ち、2年で保安隊、またさらに2年で自衛隊へと変身、エスカレートしていくわけですね。でもこの1950年に私がとても悩んだのは、あのB29が今度は日本をステップとして、連日のように朝鮮半島へ出撃していくのです。艦船もまた、日本の港から行きました。その爆撃でどうなったかなど容易に想像がつくでしょうよ、5年しか経っていないんだから。でも、みんな飢えていて、背に腹は代えられずの時代でしたから、機械がガチャッと動けば、特需景気で万札が転がり込んでくる。それをガチャ万と言って、景気は一気に焼け跡・闇市の時代から回復したのです。ここから株がぐんと上がったのは戦争物資を作るためでした。なぜならアメリカは本国から海を越えて取り寄せできずに、お休み状態になっていた日本の軍事産業に全部発注したからです。

こうして何とか飢えを凌げるようになったわけですが、私は悩みました。私に憲法の条文を教えてくれた兄がどうなったかと言うと、レッドパージの嵐が吹き荒れて教壇を追われました。小さな塾を開いて食うや食わずの生活になった兄を見て、私にとっては大変痛ましい思いで、何かできることは無いか無いかと考えました。黙っていることが認めたことになってしまう時代です。だから何か無いものかと考えた末に一つ、文章を書くことならできると思ったのです。それまでたくさんの本を読み、書いてきたから自分史を書いてみよう。私がそれまで育ってきた少年時代、貧困で打ちのめされてきた日々、それが克服できないうちに黒雲のようにやってきた戦争。友達や近所のおじさん・おばさんもみんな神隠しにあったようにいなくなり、学校も丸焼け、校舎もスクラップになり、それらは決して並みの体験ではありません。紙一重で生き残ったのだから、その体験を記録にすれば自分の劣等感を払拭できるかもしれないと思ったのです。先ず自分のために書こう、そしてそれをどなたか読んでくれた人がもしかして戦後の初心や



原点に戻ってくれるかも…一石二鳥だと思いました。300枚を目標にして17歳から始め1年で終わりました。ある方が認めてくれて1冊の単行本を世に出せたのは類まれな幸運だと思います。一人の小説家が本を読んで我が家を訪ねてきました。名前は濱本浩。浅草を舞台にする当時の流行作家の一人ですが、私をレストランに招いてくれて、「君は書ける、書かないといけない。君は若いから…」とおだてられて自信が付き、そこからは怖いもの知らずで、じゃんじゃん書きました。次々と映画化され、東宝、松竹、東映などなど。今はビデオで観られるので大変ラッキーです。そうこうしている間に100冊あまり書いてしまいました。

その私が街頭に立つことはめったにありませんが、6年前の2003年3月21日、新宿の駅頭に立ち初めて演説しました。なぜかという、その前日に国連無視のアメリカによるイラク戦争が勃発したのです。どうしてこの戦争が違法だったかと言うと、大量破壊兵器があるか無いか、国連の査察団がイラクに入って調査の真最中だった。しかもニューヨークのテロ事件はイラク軍が空爆でやったのではない。強烈な反米テロで国際的な犯罪なのですが、なのにブッシュ大統領は、「これが戦争だ。これは報復だ。」とアフガニスタン攻撃からイラク戦争へとエスカレートしたのですね。「テロが暴力なら報復もまた暴力である」ということに気がつかなかったのか。そこから21世紀は報復の連鎖になりました。21世紀は平和な世の中に…と思っていましたがとんでもありません。新宿の駅頭で小さな宣伝カーの上から反戦や平和を訴える人たちが順番にマイクを握ったのですが、新宿駅に流れる人たちの足は止められませんでした。もっとも早乙女勝元なんてどこの馬の骨か誰も知りませんし、早乙女主水之介とか早乙女太一だったら違ったでしょうけどね。

無力感に襲われながら、それでも日本の国際貢献はどういうものなのか訴えました。国際貢献には二通りあり、1国際軍事貢献、2国際平和貢献。被爆国日本がそのどちらをとるべきか、言うまでもありません。本当の意味での国際貢献とは世界中から戦争をなくすことでしょ？ アメリカにくっついて戦争の片棒を担ぐなんてことは絶対になりません。「殺すな、殺されるな！」と叫んだけれども無力感に襲われました。でも、考えてみると、あの戦争末期に新宿駅に立って「戦争反対！」なんて言っていた人は誰もいません。いたとしたら多分「この非国民！この国賊！」と袋叩きに会い、特高警察に捕まっていたでしょうし、無事に家には帰れるとは思えません。

今なら言える。言えるうちにその一声を、と思いながら6年が過ぎ、私の年齢も77歳。7歳下の妻が6年前に出先で突然倒れて急逝したのですが、そのあたりから俄かに残り時間が気になってきました。もはや直接的に戦争を語り継ぐにはそんなに長い時間はありません。今や体験は歴史に移行しようとしていて、戦争の体験は直接的な段階を終え、残されたのは追体験しかありません。体験しないことを追いかけて行って、体験したように学ぶ、知るということがこれからの世代にとってとりわけ大事なことですよね。

そういう状況の中、東京都が9年前、平和祈念館の建設計画を凍結させたのです。我々はやむにやまれぬ決断で、民間募金で東京大空襲・戦災資料センターを立ち上げました。江東区の200坪近い土地を平和への熱意を強くお持ちの女性からタダでいただき、上物を作るのに1億円の募金を集め、さらに手狭になりもう1億円の増築募金をして完成。目下のところ小さな3階建ての建物に全国から年間180校ほどの修学旅行生徒を迎

えています。

平和の種蒔きはささやかですけれども、今それは芽を出しつつあると思います。この運動を主にして私は声を大にしてこう訴えてきました。「知っているなら伝えよう、知らないなら学ぼう」と。そういうことで私自身、戦争のことをいろいろ本に書きますので細かく調べてきました。そうすると憲法9条が無くなったらどうなるか、という質問に答えられるようなデータを紹介できると思います。憲法9条が無くなった時どうなるか、は誰も経験していないので分かりません。私たちは憲法9条にずっと守られてきたのです。だから、もし無くなっても「大したことないんじゃないの？ 今の状況が続くんじゃない…」などという方がいるかもしれませんが、憲法9条が無くなった時の状態は、無かった頃のことを振り返れば、ある程度の予想がつきます。

その1番目は、昭和19年、日本の軍事費は国家予算のどれくらいの割合だったか？ 岩波新書『昭和史』によれば、驚くなかれ85.5%！ 国民生活は極度の窮乏に追いつめられていたのがよくわかります。その他にもいろいろな債権を発行したり、戦争ってそれほど金がかかるのです。では、85.5%の軍事費で維持できていた日本軍はどのくらいの兵力であったか？ 翌年の終戦の時点で、諸説がありますが、720万人が本当のようです。陸軍が500万、残りが海軍ですが、この時点までに戦死・戦病死した方が約160万人います。合算すると凡そ900万の大軍です。2軒に1軒は軍人を出していたではありませんか？ で、それほどの軍隊が国民を守ってくれたのか？ 旧満州で、沖縄の南部戦線で…軍は民のためにあるのでありません。国家の命令によって動くのが軍。だから民を救ってくれるというのは大間違いで、時には民に銃口を向けることもあるのです。北海道の作家三浦綾子さんの「銃口」という小説を読めばお分かりの通りです。こうして昭和20年はありとあらゆる人命がいろんな形で失われた年でした。子供も女性も、或いは高齢者達も、日本人の平均寿命は落ちに落ちたのです。

では、次のデータは意外に知られていないと思いますので、疑われる方もいらっしゃるかもと思い、厚生労働省の資料をコピーして持ってきました。

昭和20年（1945年）の日本人の平均寿命は男23.9歳、女37.5歳。信じられないくらい若い人がいっぱい死んだのです。では翌年の1946年、あの食うや食わずの焼け跡の時代ですが、男42.6歳、女51.1歳、人命と平和が見事直結しているのがお分かりですね。

では最近の2008年は男79.3歳、女86.1歳。女性は世界1位、男性は4位。残念ながら自殺者が多く、男性の30代、50代は特にですが、それでも最長寿国で、昭和20年と比べると何と男女とも約50年ほども寿命が延びました。後期高齢者医療制度など政府は長生きすると言わんばかりだが、このように寿命が延びて世界1になったのはなぜですか。それは憲法9条が生きていたからです。それが歯止めになって、直接攻撃する軍事大国へ行く道へのブレーキになっていたのです。ここまでは。ここから先の保障は分かりませんが。

来年5月には憲法改定に繋がる国民投票法が施行されます。国民投票になれば1年未満で日本の戦後の民主主義と平和は重大な岐路に立たされることになります。この分かれ道にあって、私達ひとり一人がどんな心構えで生きたらいいのか、私の話の結論にな

ってきますが、先ず1番目、自分の良心を何とかして頑張り抜かなければなりません。率直に言いますと、いろんな集会に行って、こんなことを言ってはまずいかな、主催者に迷惑が掛かるかな、とか思います。私も妥協したり自粛もしますが、それでも東京大空襲訴訟裁判の一番手の証人です。戦争を始めた政府に謝罪と賠償を求めて。国と対立したくはなかったけれども、国は私を不適當で有害な男と決めつけました。でも、言うべきことは言っておかねばなりません。私一人分の声に声なき声を重ね合わせていきたい。あの日あの時、無念の死を遂げた方々はその後に生きた者、生き残った者の心の中にしか存在しないではありませんか。その声も重ね合わせて生きる。さらに、未来への声も。まだ発言できない世代もいっぱいいますよね。私の家にも孫がいて、小学2年生、5歳、3歳がおります。暴れまくって閉口もしますが、寝顔を見ると可愛いものです。その信頼しきった安らかな寝顔を見ながら、この子たちはどういう社会や国の在り様を願っているのだろうか、しみじみと考えざるをえません。戦争ができる国がいい、なんて思っている子供は一人だっていませんよね。おそらくそれが人間そのものの原点である、という気がします。そういう未来への声も重ね合わせて、今を生きたい。

何事も全ては1から始まる。1は0に限りなく近く、微力なのは否定しません。でもその1は0と根本的に違うものです。0では世の中は何も変わらないが、1があって、それに感動が加われば2にも3にも無限大にもなる。原点は1から。平和は一人から。みんなで声をあげていきましょう。

(文責 こまえ平和フェスタ実行委員会 担当 佐久間 均)